

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

『私のまちロジャ』

シンガポール

シンガポール日本語補習授業校

中学三年 土屋 千紘

私のまちロジャ

シンガポール日本語補習授業校 中学三年
土屋 千紘（つちや ちひろ）

私のまちを表す言葉は、「ロジャ」だ。

「ロジャ」(rojak)はマレー語で「色々なものを混ぜる」という意味で、シンガポールを代表するサラダのような前菜だ。ロジャの主な材料は揚げパン、きゅうり、パイナップル、イカやピーナツで、甘辛ソースで混ぜられている。そしてシンガポールには、中華風、マレー風、インド風のロジャがある。

シンガポールは一九六五年の建国前から中華系、マレー系、インド系の移民が生活しており、まさに異なる文化や言語の「メルティングポット」だ。そんなシンガポールの多様性が魅力的だと言う人は多くいる。しかし、私は全くそうは思えなかった。

私はシンガポールで生まれ、今もシンガポールで暮らしている。だが、毎年祖父母に会いに日本に行くたび、共通した言語と文化がある日本の方が、コミュニケーションが取りやすいのだし、まとまりがあつて良いと思っていた。シンガポールは色々な文化がありすぎて、逆にごちゃごちゃしていると感じていたのだ。しかし、学校の多民族平和記念日のカーニバルで初めてこの「ロジャ」を食べた時、シンガポールの多様性について気づき学ぶことがあった。

それは去年七月、学校の「レイシャルハーモニーデー」での事だった。この日は、一九六四年に人種差別によって起きた暴動を二度と起こさないように、平和を訴える日で、学校では各民族の食べ物を食べたり、それぞれの伝統衣装を着ることが出来るのだ。私が、生徒達で賑わう中、ボーッと立っていると、友達がスキップして来て、

「レイシャルハーモニーデー最高！ やっぱりシンガポールって色々な文化があつていいよね！」

と目をキラキラさせながら言った。だが、私は小さなため息をつき、

「私はそう思わないな。シンガポールって逆に多様な文化が多すぎて、アイデンティティがないというか、まとまりがないというか。」

と答えた。友達は私を見つめ一瞬信じられないという顔をしたが、向こうにある屋台を指しながら、

「そこへ行こう！」

と私を引きずった。

その屋台には、「ロジャ」と大きな文字で書いてあった。怪訝そうに看板を見つめていると、屋台主の生徒が、

「ロジャはシンガポールの多様性を象徴する伝統食だよ。」

とてんこ盛りに入ったお椀を渡してくれた。お椀の中には色々な形に切られたロジャの具材がまるで墨汁のようにドロドロした黒いソースと共に混ぜついていた。その上、独特な甘酸っぱい匂いもして、あまり食欲をそそるものではなかった。私は思わず、

「うっわ、まずそう。」

と声を漏らしてしまった。しかし、友達の視線を感じ、私は恐る恐る揚げパンとパイナップルを楊枝で刺し、目を閉じながら口へ運んだ。

口に入れた途端、私は思わず目を見開いた。パイナップルのシャキシャキ感と揚げパンの

サクサクもちもちした感覚と、コクのある濃厚なソースがまさに絶妙なハーモニーでまとめられた一品だった。私はきゅうりやイカも楊枝で刺しては味わい、たちまちお椀は空になった。

その時、私はハツとした。全く異なる食感、味や香りの食材が一緒にソースで混ぜると予想外においしい味になるロジャが、シンガポールに似ていることを。シンガポールには色々な人種の人が入っていて、それはまさにロジャの中に入っている色々な食材と同じだ。パイナップルやイカが異なる風味を持つように、皆それぞれユニークな文化を持っている。そして、濃厚なソースが食材をまとめるように、人々はお互いをリスペクトし、愛情によって生まれた「シンガポールアイデンティティ」で一つの個性あふれるまちとして暮らしている。

今まで、私はシンガポールの多様性を理解できず、大事にしていなかったと思う。学校や近所でも、異なる民族の人に話しかけるのを控えていた。私は他人の文化から学び、視野を広げるチャンス、そして友達を作る機会を逃していたかもしれない。

でも、今日気付けたのだからまだ遅くない。私の胸にワクワク感が湧いてきた。もつと他の民族について学びたい。もつと人生を豊かにしたい。私は私のまちである「ロジャ」的なシンガポールを誇らしく思った。